

---

# ねこねこぴーち

チエリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ねこねこぴーち

### 【NZコード】

NZ83700

### 【作者名】

チヨリ

### 【あらすじ】

遅刻ギリギリの朝、駅の階段から落ちた私。

突然現れた死神に猫にされ、そして身代わり捜しをする事に……。

ノの日

私・門倉萌々（かどくらもも）は慌てて家を飛び出した。

昨夜、目覚ましの電池が切れた。

いや、正確には夜中にかな？

そろそろ電池が切れる頃、だと思いつつ、田舎ましをセッティングした時点  
で既に

正確な時刻を刻んでいなかつた。

私はそれに気付かず二つものよしごと見ましたをセサテして躍つてしまつたのだ。

で、今朝その田覚ましが鳴る前に妹に起された。

田覚まし時計を見ると明け方の四時十三分で針が止まっていた。

そんな訳で遅刻を全力で回避する為にダッシュで家を飛び出したのだ。

駅に着いてホームに下りる階段を駆け下りていると、電車が入つてくるのが見えた。

いつも乗っている電車より一本後の電車だ。

これに乗り遅れてしまつとホントに遅刻してしまつ。

しかし、そんな時に限つて手に持つたままだつた定期入れを落とす私。

「あつ」

階段の途中で足を止め、落ちた定期入れに手を伸ばした。

すると、急に立ち止まつたものだから私のすぐ後ろにいた中年のサラリーマンがぶつかつた。

「きやつー!?

当然バランスを崩す私。

「危ねえなつ、もう!」

私の肩にぶつかつたおじさんのチッといづ舌打ちが聞こえた。

そして、後頭部に物凄い衝撃を感じた

。

……田を開けると真っ暗だった。

辺りを見回しても何も見えない。

何も聞こえない。

空氣もひんやりしている。

瞬きを数回して暗闇に田が慣れるのを待つていると、背後に気配を感じた。

(……誰?)

恐る恐る振り返った。

すると、そこには漆黒のロープを身に纏つた人物が立っていた。

顔は暗いし、フードを被っているからよくわからない。

辛うじてわかるのは腰の辺りまであるウエーブがかかった金髪と右  
手に持った大きな鎌。

「アンタ……“カドクラモモ”……？」

薄いピンク色の艶のある唇が怪しく動いた。

色氣のある顔……だけどとても低い声が耳に響く。

(……男?)

「アハ、 ですけど……あなたは?」

「アタシはジャスマシン」

「ジャスマシン……やん?」

(人)の、何者?)

「なーんか、 資料と違つ氣があるけど……ま、 いいわ

「？」

「んじや、サクツと狩つて終わらせちゃうから大人しくしてなさい？」

「え？ な、何をする気なんですか？」

「何つてもちろん、アンタの魂を狩りに来たんだからやる事は一つ上」

「ええつー？」

「んじや、行くわよ？」

「ちょ、ちょっと待つてーつーーー！」

ジャスミンと名乗った人物はそう言つと大鎌を振り上げた。

「何がなんだか……そつぱり……」

「んー、もつつ、何よ？」

「だ・か・ら、アタシはアンタの魂を狩りに来た死神なのー！」

「し、死神……？」

「そ。アンタわっさ、階段から落ちて死んだでしょ？だからアタシが

「ひしてわざわざ魂を回収して来てやったのよ」

「え……私、死んだんですか？」

(う、うそぉー？ てか、この人ひょっとして、お姉系キャラ？…)

「わつよ。まあ、正確にはまだ死んでないけどね。あ、そうだ。

魂狩る前にけやんと確認取つておかないとねー。

最近、上層部がつるむそこから

「……」

「アンタ、名前と年齢言つて」

「か、門倉萌々…… 17歳、です」

「はあ？ ちょっとおー、今から魂狩られるって人間が歳を誤魔化してんじゃないわよ」

「『』、誤魔化してないですよ」

「ホント〜？」

「本当ですか？」

私がそう答えるとジャスミンさんは身を屈めて顔を近づけて來た。

そして長く伸びた真っ黒な爪先で私の頬をつついた。

「うーん、確かにこの肌の張りと艶は十七歳ねえ……アタシにはないわ。悔しいけど」

「……ジャ、ジャスミンさんも肌キレイですよお？」

「あらあ、嬉しい事言つてくれるじゃない でも、魂はきつちつ狩るわよ」

「は、はあ……」

別に媚を売つうとして言つた訳じゃない。

私の目の前にあるジャスミンさんの顔は本当に男性なのかと疑つてしまつぐらごとも綺麗で

首元から名前の通り、仄かにジャスミンの香りもする。

「あー、でも、なんか腑に落ちないわねえー」

「何がですか？」

「アンタの情報、事前に上層部から聞いてたのと違つて  
「うつえ」

ジャスミンさんは眉間に皺を寄せると、どこからともなく数枚の書類を取り出した。

（あの紙に私の情報が書いてあるのかな？）

「あ……」

そして十数秒後、ジャスミンさんの左の眉がぴくぴく動いた。

（な、何……？）

「……」

ジャスミンさんは暫し考え、再び私に視線を戻した。

口の端が僅かに上がっている。

(何なのーっ?)

「ねえ、アンタ……」

「はい?」

「アタシと取引しない?」

「取引?」

「もし、アンタが望むなら」のまま魂を狩らずに下界に戻してあげる

「ほ、本当ですか？」

「但し、猫の姿でね」

「猫ー?」

「でも、安心なさい。アンタの代わりになる魂を見つけたらちゃんと人間に戻してあげるわ」

「代わりって……そんな……つ」

「別に」アタシはいいのよおー？」そのまま魂を狩っちゃつても

「……」

「コレを見なさい」

ジャスミンちゃんはいつも私の足元にどこか室内の様子を映し出した。

(……あつー)

「お父さん、お母さん、寧々」

映し出された光景の中には両親と妹の寧々（ねね）がいた。

それに、私もいる……

ベッドに寝ているのが私、それを囲むように両親と妹がいて悲しそうに俯いている。

「今の下界の様子よ。階段から落ちたアンタは頭を強く打つて病院に運ばれた。

けど、打ち所が悪くてね……今はまだアタシが魂を狩っていないから辛うじて息だけはしているわ」

「それじゃあ……」

「やつ、今ここでアタシがアンタを狩れば……後はどうなるか、わかるわよね？」

「……」

「猫になってアンタが代わりの人間を見つけることが出来れば、魂はあそこにある体に返してあげる」

「でも……じゃあ、ここにいる私は？」

「今、ここにいるアンタは本物そっくりの仮初めの姿よ

（仮初め……）

「またあの本物の体で家族の元に戻りたければ、代わりの人間を見つけなさい」

ジャスミンさんは足元に映る病室の様子を一瞥した後、私の目を鋭く見据えた。

顔にかかるほど長い前髪の下、その恐ろしいほど的眼光に捕らえられた私はただ頷くしかなかつた。

…… 6、7、8、9、10……。

ジャスミンさんに十秒間目を開けていたように言われた私は頭の中で十数えた。

すると、さっきまで感じていたジャスミンさんの気配と香りが消え、辺りが明るくなつた気がした。

(うう……どうだらうへ。)

ゆっくりと目を開けてみると、そこは私の知らない場所だった。

ただ人通りは多い。

周りを見回しても目線が低過ぎてよくわからない。

上を見上げてみると高架があつた。

(駅の近くかな？ てか、線路ってあんな高いところにあつたっけ？)

そこで私は気がついた。

(……そうだ、私、猫になっちゃったんだっ)

5m先に見えるコンビニの前に行き、入口の自動ドアに映った自分の姿を確認する。

(猫だ……)

そこに映りこんでいたのは黒い猫だった。

小さな、小さな真っ黒い猫。

それが今の私の姿。

(さへ、これからどうじょうか?)

コンビニの前から見える駅を見つめながら考えていると、暫くして  
私の知っている人が

改札から出てきた。

「ニヤアーン（あひ）」

それは私が片想いしている相手・新堂純平君しんじょうじゅんぺいくんだった。

「ニヤアーン！（新堂くん！）」

思わず名前を呼びながら駆け寄る。

しかし、猫だから“ニヤー”としか鳴けなかつた。

新堂君はいつも私が声を掛けると笑いながら手を振ってくれる。

だけど今日は何故かピタリと足を止め、怪訝な顔をした。

「一いや？（あれ？）」

（あ、そつか。今、猫だもんね）

私は眉間に皺を寄せたまま再び歩き出した彼について行った。

「……」

そして暫くすると無言で彼が振り返った。

その顔つきはあからさまに嫌そうだった。

（なんで、そんな顔するのー？）

「モー、ここへ来なよー」

「イヤシーハ（えつー・ハ）」

「……」

新堂君はやつぱり早足でまた歩き始めた。

「イヤマー……（新堂君……）」

（ひょっとして……）

「イヤマー（待つヒー）」

ついてくるなと叫われたけれど、それでも私は彼の後を追った。

今度は気付かれないように。

（仔猫で良かった）

新堂君が振り向きたくなつても体がちぢりやいから何処にでも隠  
れられるし、

肉球のおかげで物音を立てずに後がつけられる。

そつして彼は何度も後ろを振り返つて警戒しながら家の中に入った。

(「( )が新堂君の家かー」)

真っ白な壁に薄いブラウンの屋根の一階建てのお家。

玄関のドアがパタンと閉じられると中から彼が「ただいまー」と言  
つたのが聞こえた。

(ふみゅうー……新堂君の後を追いかけてみたのはいいんだけど……  
…これからどうしよう?)

暫しの間、考える。

すると一階の部屋の窓が開いて新堂君の姿が見えた。

(あ、新堂君)

新堂君は私に気がつくとまた嫌そうな顔をした。

(まだ……やっぱり新堂君、猫嫌いなのかなあ?)

猫じゃなくて犬にして貰えればよかつた……。

辺りがすっかり暗くなつてた頃、空を見上げると雲に雲で覆われていた。

こつもなう星が見えるの。今日はずいぶん見えない。

(雨、降りそり……)

そう想つてみると顔にポタリと雨粒が落ちてきた。

(……冷たい)

一滴、二滴……段々、ポツポツと雨が強くなつて来て、あつという間に

私の小さな体を濡らしていった。

(寒——)

キヨロキヨロと辺りを見回してどこか雨宿りが出来る場所を捜していると、

二階にある彼の部屋の窓が閉められ、カーテンが引かれた。

「ニヤアー……（新堂君……）」

窓際に映っているシルエットに向かつて鳴いてみる。

けれど、私の小さな鳴き声は大きな雨音に掩き消された。

。

冷たい雨の中、

私は新堂君の部屋が見えるこの場所から動かずについた。

そしてもう一度シルエットだけでも彼の姿を見る事が出来たり……  
と思いながら

カーテンが閉められた二階の部屋を見つめていると、フツと灯りが  
消えた。

(寝ちゃったのかな?)

時計を持つていなければ正確な時間はわからない。

(雨、冷たいナビリーリコム……)

だつて、じにいれば明日の朝、新堂君が学校に行く時に見送る事が出来る。

だから私はそのまま目を閉じて眠った。

「おーい、チビ助」

それからどれくらいの時間が経ったのか突然、頭の上から声がした。

眠りが浅かつた私は、その声に目を覚ますと裸足にサンダルを履いた誰かの足元が見えた。

「……ニヤウー？（誰ー？）」

顔を上げると新堂君が私の目の前にしゃがみこんでいた。

傘を差して心配な顔で私を見下ろしている。

「おまえ、雨宿りもしないでずっとこんな所にいたら風邪ひっちゃつべっ！」

(だつてー……)

「首輪してなーコみると野良か……まだこんなちつちつこのに親猫が傍に

いなーって事は捨てられたのか？」

新堂君はさう言いつと兩で濡れている私の頭を軽く指で撫でた。

そして私の首根を掴み、ひょこと持ち上げて「しょーがねーなあー」と

家の中に入れてくれた。

(新堂君のお家だー)

でも、ずぶ濡れの私は家中に入れても、もう少し寒くて震えていた。

(えへん、寒いよ)

新堂君は私の首根を掴んだまま家の奥へと足を進めた。

家族もみんな毛づ纏っているのか家中の灯りが消されている。

私は、ふらへんと前足も後ろ足もバタつかせる事もなく運ばれていた。

すると、彼に「おまえ、大人しいヤツだな」と笑われてしまった。

(てゆーかね、おなかすいちゃったの……)

寒くて動けないというのもあるけれど、気がつけば朝御飯を食べたきりだった。

新堂君は玄関から廊下を通り、浴室に入った。

そして、私を浴室の床にそっと置くと温かいシャワーを体にかけてくれた。

「フミヤーン（あつたかーい）」

「あはは、おまえホントに気持ち悪いな顔するなー」

（だって、ホントに気持ちいいんだもーん）

「ほら、体もついでにきれいに洗ってやるから、大人しくしてろよ？」

「//ヤツ！？（えつ！？）」

「まさかと思つたが、洗つたらいきなり白猫だつたつてゆーオチはないよな？」

新堂君はアハハツと笑いながら掌にちょつとだけボディシャンプーを取つて泡立てると

私の小さな体を撫でるように洗い始めた。

( むせや～っ )

「よしよし、そのまま爪引っ込めてるよー？」

( も、もひダメ……キウン死しそひ…… )

背中を撫でるよつと洗つた後、今度は仰向けにされておなかを撫でられていくと、

新堂君が「あ……」と言つた。

( ? )

「おまえ、女の子だったのかー」

「——ヤウー（やうだよー）」

「じゃあ、もつと優しく洗つてやんないとな?」

新堂君はそう言つて一ヵつと笑つと、せつねめでよつともつと優しく撫で始めた。

……もう、昇天寸前です……。

「ちよつといじで待つてうな？」

新堂君はお風呂に入ってくれた後、私を抱きかかえて一階の部屋に連れて来ると、

私を残してまたすぐこ下りて行った。

(「(一)、新堂君のお部屋かな?」)

ちよつと探検。

部屋に入つてすぐ左側にクローゼット。

その奥に低めのチオストがあつてその上にテレビが置いてある。

窓際にある机の上は意外ときれいに片付いていて、机の横には新堂君のかばんと

壁際に制服が掛けられていた。

窓にはクリーム色のカーテン。

部屋の右側を占めているシングルベッドは鮮やかな薄いグリーンのシーツだ。

(ん?)

セントベッドのトニー数冊の雑誌があるのが見えた。

(「、これは……まさか……）

……見なかつた事にしよう。

うん、そうしよう。

「ほり、温かいミルクだぞー、おなかすいてんだろ?」

しばらくして部屋に戻ってきた新堂君は温かいミルクが入ったお皿を私の目の前に置いた。

(し、新堂君…… ありがとう)

ペロッと呑み下すだけ味見してみた。

熱くもなく、冷たくもないちょうどいい温度だ。

「一やーん（おこしーい）」

「いっぱい飲んで大きくなれよ」

新堂君は優しくそう言いながら頭を撫でてくれた。

「俺、ホント言つと猫嫌いなんだけどなー」

（つー？　はううう……やつぱり新堂君、猫嫌いだったんだ……）

「でも、おまえは大人しいから大丈夫かも」

そう言つてミルクを飲む私の頭を撫でてくれている新堂君。

昔、猫で何か嫌な事があったのかもしれない。

それでも、大人しいという理由だけでこうして頭を撫でてくれる彼  
はやっぱり

優しい人なんだと私は思う。

「じゃあな、チビ助」

翌朝、新堂君はそう言って私を家の前の道端に下ろした。

「俺、子供の頃に猫に引っ搔かれて大泣きした事があつてさ、結構トラウマなんだよ。」

おまえはまだ仔猫だから」「置いて行くのは心配だけど……」

「//コウウ……（やうだつたんだ……）」

昨夜、新堂君にミルクを飲ませて貢つてお腹一杯になつた私はそのまま眠つてしまつた。

そして朝、彼の携帯の目覚ましのアラームで目が覚めた。

すると私の体にはふわふわのタオルが掛けられていた。

（私が風邪引かないように掛けてくれたのかな？）

“結構なトラウマ”なのに昨夜、新堂君は私を助けてくれた。

雨の中、寒くて寒くて震えている私を助けてくれた。

朝、登校する新堂君の姿を一皿見るためだけにそこで蹲つて寝ていた私を拾つて

お風呂まで入れて温かいミルクまで飲ませてくれた。

(新堂君、ありがとうございます)

「可哀想だとは思つけど、俺、やつぱり猫苦手なんだよなー。

今はちっちゃいし、大人しいかもしないけど、この先おまえがどんどん大きくなつて

俺の事、引っ搔くかもしれないだろ？ そうなつたらおまえの事嫌いになるかもしれない

「ニヤーン（引っ搔いたりしないもん）」

「頑張って生きろよ」

彼はそう言ひと私に手を振つて歩き出した。

私はその後姿を暫く見送つた。

見送つて、こつそり後をつけた。

彼は時々振り返つていた。

その度に私は物陰に身を隠していたけれど駅に入る前、彼がクスッと笑つた。

多分、私が後をつけていた事がバレバレだつたんだろう。

そして、彼は改札を通つて見えなくなつた。

(行つちやつた……)

本当なら私も今頃電車に乗つて学校に通つてこりる時間だ。

(でも、また夕方ここで待つてれば会えるかな?)

“猫嫌い”の新堂君に付き纏つてしまはないけれど、遠くから見つめのくらいなら

許してくれるよね?

あれから私は新堂君の後をずっとつけていた。

朝は家から駅まで、夕方は駅から家まで。

でも、新堂君には気が付かれないようにした。

見つかってしまうとまた私を気にして猫嫌いなのに無理して優しくしてくれる気がするから。

だから、絶対気が付かれない様に新堂君の後をついて行った。

人間だつたら完璧に“危ないストーカー”だ。

わかつてはいるけれど、今日も朝から学校に向かう新堂君を駅で見送った後、

ポーッとしているどどこからかジャスミンさんの声が聞こえた。

「ちよっと、アンタ」

「あ、ジャスミンさん」

( こいつの間に現れたんだろ? )

こんな変わった格好をしている人物が立っているのに周りの人達はジャスミンさんの姿が見えていないみたいだ。

みんな驚く様子もない。

「『あ、ジャスミンさん』じゃないわよ。何やつてんのよー」

「え?」

「まさか、アンタ……自分がなんで猫になつてんのか忘れた訳じやないわよねえ?」

(あ……)

「アタシはアンタに代わりの魂を探させる為に猫にしてもらひたのよ。」

好きな男のストーカーをしきりとは一貫もしていないわよ!」

「わ、わかっています」

(さうだった……忘れてたー)

「どう見ても“忘れてました”って顔だけど? ま、いいわ。

とにかく、チントラしてないで早く見つけなさいよ。」

ジャスミンさんはそう言つと私の目の前から霧が晴れる様に消えていった。

“代わりを見つける”

改めて言われても私の代わりに死んでほしいと思つ程恨んでいる人  
はいないし、

係わりも無ければ何の恨みもない人を代わりにする訳にはいかない。

(どうじよつかなー)

そして、その場で考え込んでいると今度は数匹の猫が私に近づいてきた。

「ニヤーハー（ひょつと、わいのおチビちゃん）」

「ニヤーン？（この辺じや見かけない顔だねえ？）」

「ニヤオー？（新顔？）」

「ニヤアーゴ？（数日前からよくひみつひみつしてるけど、俺達への挨拶がまだじやねえ？）」

斑や茶と、きじと、三毛、後はベンガルの野良猫達は私の左右と後ろを囲んだ。

（……）

私は思わず逃げ出しだ。

「フニヤーッー（ララ、待てーー）」

後ろを追いかけてくる大きな猫達。

仔猫の私は一生懸命走った。

でもきっと簡単に追いつかれてしまう。

それでも私は必死で走った。

新堂君の家に向かって。

無意識のうちに足が向かっていた。

野良猫達との距離はまだある。

(なんで? なんで、追いつかれないの?)

その理由はそれからすぐにわかった。

駅から離れ、かなり人通りが少なくなった住宅街に入ったところで

野良猫達が

追いかけてくるスピードが一気に速くなり、あつと言つ間に私に追いついた。

「一ヤー、ゴー？」（）「うわでいいんじやないか？」

一番大きな体のボスみたいな斑猫が私の目の前に回り込んだ。

私が足を止めて立ち止まると、今度は全方向を囲まれた。

どうやら駅前の人通りが多い場所を避けたかったようだ。

（し、新堂君……怖いよ……）

「ありがとうございました」

ふかふかの暖かいベッドの中にいる感覚の中で新堂君の声が聞こえた気がして目が覚めた。

「お大事にー」

これは知らない人の声。

クンクン……

(消毒の臭い……病院?)

自分は今、どこにいるんだろうか?

顔を上げよつとして体中に激しい痛みが走った。

「ニヤツ！？（痛つ！？）」

「お、田が覚めたみたいだな」

「//ヤウ~（あれ、新堂君？）」

新堂君が私をタオルに包んで両腕で優しく抱えてくれていた。

「学校から帰つてきたら、いきなつおまえが血だらけで家の前にぶつ倒れてたから

びつくつしたぞー？ 近所の野良こ苛められたやつだったのか？」

（……そうだ、私……あの野良ちやん達に囲まれていっぱい引っ搔かれたり、

噛みつかれたりして怪我をして夢中で逃げて、でもおなかが空き過ぎて

意識が朦朧としていつて……そつか……それで私、新堂君のお家の前で倒れてたんだ）

「でも、深い傷はなにからすぐ治るって獸医さんも言つたから  
ちょっと安心した」

そう言つた新堂君はまだ制服を着たままだった。

「//カーネ（新堂君）……」

学校から帰つてすぐに私を病院まで連れて来てくれたんだ。

「『』めんな。俺があの時、おまえを置いていかなかったら、こんな  
怪我しなくて済んだのにな」

新堂君は後悔した様に私の頭を撫でた。

「//ヤウー（新堂君の所為じゃなによ）

「でも、今日からまたやるから」と俺が守つてやるから

「ニヤフッ？（えつ～）」

(そ、それって……と言つ事は……私……私、もしかして……)

「家に帰つたら一緒に飯食べような？ おなかすいてるだろ？」

(新堂君のペツトになつたつて事……つ？)

「今日はもう遅いけど、明日おまえに似合つ首輪をちゃんと買つて  
来てやるからな」

新堂君はそう言つと私の喉元を人差し指で軽く撫でてこつこり笑つ  
た。

翌日。

「ただいまー」

夕方六時過ぎ、新堂君が学校から帰つて來た。

「一やへン（おかえり）」

「チビ助、いい子にしてたか？」

「ハヤー（うさん）」

「やうが、よしよし。じゃあ、」優美あげなくちやな

新堂君はやうやくカバンの中を「コンコン」と探り、小さな袋を出した。

「約束通り、おまえの首輪を買つて來たんだ。氣に入るといいけどなー？」

そう言つて新堂君がカバンから出したペットショップの袋から出できた物は可愛いピンク色の首輪だった。

真ん丸いゴールドのバックルに同じゴールドのハートのチャームが付いている。

「いやオッ（わあっ）」

「着けてやるから引っ搔いたりしないでじつとじてろよー？」

「いやン（うん）」

（てか、新堂君まだ私が引っ搔くと思ってるんだ？）

猫になつたと言つても私は爪なんて立てる事しないのー。

「よーし、これでどうだ？」

新堂君は首輪を付けた私を抱き上げ、そして一カツと笑つた。

「うん、同意」

「いやハーン（ありがとー、新堂君）」

「あはは、氣に入ったみたいだな、チビ助」

「イヤウーイヤウ（もひるご）」

「あー、でも……」

「ハーハー（うふふ）」

「女の子こ“チビ助”はなー……よこり、お前をせかよー。」

新堂君はやつぱり私を田の前にストンとトウヒ、

「うん……そうだなあー……」

私の顔をまじまじと見つめながら腕組みをして少し考えた後、

「“ルーチ”につけづけー」と呟いた。

( “ルーチ” ? )

「首輪もちよつビックリングだし、決めた！」

( 首輪の色からとったの？ )

「ピース」

「ニヤーン(はーこ)」

「お、返事した。てか、おまえ人間の言葉がわかつて相槌するみたいに

鳴く時があるよなー」

(だつて、わかってるもん)

そつだよ……わかってるんだよ。

ナビ……そんな風に見つめ返しても彼は“私”だと気が付かない

。

「ペーク」

翌朝、新堂君の声で目が覚めた。

「学校、行つて来るから。ちやんと良こすこしてみよ。」

「うさ（うさ）」

優しく頭を撫でてくれる新堂君。

それがとっても気持ち良くて思わず私は甘えた声になつた。

「帰つて来たらまた一緒にご飯食べような？」

新堂君はそう言つと私に手を振つて部屋を出た。

窓際に行つて彼の後ろ姿を見送つていると私の視線に気付いたのか

振り返つて小さく笑つた後にまた手を振つてくれた。

(……幸せ )

別にもう人間に戻れなくてもいい。

私の体に戻るより、このまま仔猫でいた方が新堂君の傍に居られる。

ずっと近くにいられるもん。

数週間後。

私の怪我もすっかり良くなつた。

そんなある日の夕方 、

新堂君がいつもより遅い時間に帰宅した。

「 ハヤウカー？ ( 新堂君、どこ行つてたの？ ) 」

私が話し掛けると、新堂君はとても哀しそうな顔で私を抱き上げた。

「 パーチ……」

「ニヤアーン? (どうしたの?)」

新堂君は暫く腕の中で私の頭を撫でた後、意外な事を口にした。

「俺、好きな子がいるんだけどさ……」

(え……つー?)

「……最近、ずっと見かけなくて気になつてその子のクラスメイトに訊いたら……怪我で入院してるって……」

(……新堂君、好きな人がいたんだ……? ショック……)

「今日、その子が入院してる病院に行って来たんだ……」

(それで遅くなつたんだ?)

「…………ナビ、そのナ……黙はつてゐるの?」、意識がなぐれて……

新堂和はとても辛いひどい今にも泣き出しそうだつた。

「まるで……死んでるみたいだつた……」

(死んでる……?)

「俺がいくら名前を呼んでも、話しかけても……無反応だった……、

いつも俺が『門倉わん』って呼んだら、すぐに振り向いて笑つてくれたのに……」

(……え? “門倉わん”? )

「あの子たれ……“萌々”って書いつ名前なんだ。可愛いだろ？」

「……」（ヤーン……）（ハ、うん……）

（わ……私つー…?）

「実は、おまえの名前、その子の名前から取ったんだよ。

本当は“桃”じゃなくて“萌々”なんだけどな、“桃”的ピーチ」

（わつだつたんだ……）

「……門倉さん、大丈夫かな？ そのまま田が覚めなかつたら……」

（新堂君……）

「——ヤホー（大丈夫だよー）」

「あはは、ピーチ、俺を慰めてくれてるのか？」

（じゃなくて……私、絶対、“代わり”を見つけるから）

だって……そうすれば、私は人間の姿で再び新堂君の前に姿を現す事が出来るんだもん。

「慰めてくれたお礼って訳じゃないけど、明日は学校休みだし、久々に何も予定無いから、

いっぺん遊んでやれるか？

おまえの傷もだいぶ良くなつて來たし、天氣がよかつたら公園にでも散歩に行くか」

「——ヤホー（やつたー）」

夜、

新堂君と晩御飯を食べた後、彼の膝の上で一緒にテレビを見ている  
と、携帯が鳴った。

着信表示を見るなり眉間に皺を寄せる新堂君。

(?)

「……もしもし？」

そして、ちょっとだけ不機嫌そうな声で話し始めた。

(新堂君がこんな嫌そうな顔するのって……誰からだ？)

会話の内容までは聞き取れないけれど、新堂君の携帯の匂いいつからまだ

微かに女の子の声が聞こえた。

(……誰?)

なんとなく聞き覚えのある声だけ……

(んー? 誰だっけ……?)

その後 、

私が考へて いる間に電話終了。

「 ピーチ、『 めん …… セッカク明日は休みだからゆづくと一緒に遊

べのと迷つたの」「

予定が入つちやつたよ……」「

「——? (えー、何?)」

「同じ高校の子なんだナゾ、なんか話があるんだって……呼び出された」

(それって……告白とかじゃないの?)

「断りついたの」「強引に電話切られた。

けど、なるべく早く帰つて来るから」

やつ置いて優しく私の頭を撫でる新堂君。

「ペー? 怒つたのか?」

頭を撫でられても何も反応しないでいるし、私が怒つたと思つたのか

彼はちよつと困り顔で私を抱き上げた。

(怒つてないけど、このまま無反応だと新堂君はどういふことを思つるかな?)

「「あんまり……機嫌直せよ……」

そうついつて優しく長い指先で私の頭を撫でて……

そして、チュッと小さく音を立てて軽くキスをした。

(え……)

「今の、俺のファーストキスなんだぞ?　おまえに捧げるから、機嫌直せ?」

(し、新堂君……)

「……て、おまえにとつてもファーストキスだよな？」

「いや、ううん……」

「あ、やっ！ 反応した。女の子ってやっぱキスに弱いのか？」

（し、新堂君、それは……何から得た情報？）

「じゃあ、ピーチ、すぐ戻つて来るから。大人しく待つててな？」

午前十時前、新堂君は出掛けていった。

(「うそりついて行つちゃあつかなー？」)

大人しく待つてなんかいられない。

だつて、誰と会うのかすごく気になるもん。

私はいつも少しだけ開いてる窓から外に出た。

彼に気付かれないようについて行くと、駅前の通りに出た。

(電車に乗るのかな?)

もしもしそうならこれ以上の尾行は出来ない。

しかし、それでも一応ついて行く。

すると彼は駅の近くにある公園に入った。

私も後に続いて入ると、すべり台やブランコの遊具の向いに、

一番奥のベンチに私と同じ年くらいの女の子が座っていた。

その子へと近づく新堂君。

(待ち合せの相手ってあの子かな？ なんとなく

見た事がある気がするけど……誰だろう？)

顔を確かめてそろそろ近づいてみる。

新堂君がその女の子の前に立つと、彼女は羞恥心で顔を上げた。

(……あ)

その女の子の顔がはつきり見えた瞬間、私は自分の予感が的中したのだと感じた。

だって、いつも何かと新堂君にぴったりくっついているあの伊崎奈  
保子だったから。

「新堂君……私の事、どう……思つてゐる?」

伊崎さんは少し俯いて彼に訊ねた。

「どうして……」

困ったように眉根を寄せた新堂君。

私はドキドキしながら茂みに隠れて聞いていた。

「新堂君は今、好きな子とか……いるの?」

「…………」

「誰?」

「……」

「教えて？」

強引に聞かせようとする伊崎さん。

「誰だつていいだろ？」

そんな彼女に新堂君は少し素っ気無く返した。

「……門倉さんでしょ？」

伊崎さんは絶対の確信があるのか、そつなんでしょう？　とこつ感じで新堂君を見つめた。

「昨日、彼女のお見舞いに行つたでしょ？」

「どうして、それを……？」

「門倉さんが入院してる病院、つちの病院なの。

それでパパが私と同じ学校で同じ学年の子が入院してて言ってたから、

誰かと見に行つたの……そしたら……新堂君が門倉さんの病室にいたから……、

別になんとも思つていない子なら、わざわざお見舞いなんて行かないでしょ？

だから……もしかして新堂君、門倉さんの事、好きなんじゃないかと思つて……」

「……」

「彼女の事、想つても無駄よ？」

「それ……どうこいつ意味？」

「あの子、もう何日も意識がないの。辛うじて集中治療室には入つてないけど、

ナースステーションの田の前の病室にいる意味……新堂君だつてわかるでしょ？」

(それって……こいつ容態が急変するかわからなーいとか、そういう事?)

「……」

新堂君は黙つたまま俯いていた。

「もし、新堂君が私と付き合つてくれるなら、門倉さんの事、助けてあげる」

(え……?)

「……」

新堂君はハッと顔を上げた。

「今ままだと、多分、後何日もしない内に死んじゃうわ。

でも、新堂君が私と付き合ってくれるって言つなら、パパに頼んで

最高権威の医師を呼んでもらひつかう」

(何よ……それ……)

私はまさか彼女が私の命と引き換えに新堂君に交際を迫るだなんて思つてもみなかつた。

次の瞬間……、

ビンからか、ジャスミンの香りがした。

(……ジャスミンをなん?)

「ちゅうじこい子が見つかってない?」

その声に振り返ると、不気味な笑みを浮かべたジャスミンさんが立っていた。

「あの子、殺しちゃこなさい」

「え……伊崎さんを、ですか?」

「ちゅうじ……あの女、アンタの命を盾にして交際迫つてんのよ?」

だけどアンタがあの女の命を狩れば、あの女は死んでアンタは元に戻る事が出来るわ。

「んじゃない事ないじゃない?」

「で、でも……」

「……」

「……」

れちやうわよ？」

「……」

「あの医者なり…………確実に門倉さんを助けられるのか？」

私が新堂君の方に振り返ると、彼は真剣な顔で言った。

「俺が伊崎さんと付き合えば門倉さんは本当に助かるのか？」

(…………新堂君？)

「ええ、そう」

(駄目だよっ！ だって、私、本当はもう死んでるんだよっ？  
代わりを見つければ助からないんだよっ？)

「——ヤフーッ——（驅かれぢや黙田——）」

私は思わず茂みから飛び出し、新堂君と伊崎さんの間に割って入った。

「やあつー？　何よ、この猫？」

「——チツ——」

「……え、この猫……新堂君、知つてゐるの？」

「ああ……俺の猫」

「そ、そつ

「——チ、おまえ、家にいたんじやなかつたのか？」

そう言って優しく私を抱き上げる。

「——（だひて）『

「俺を迎えてきたのか？」

新堂君は優しい笑みを浮かべて私の頭をよしよしと撫でた。

「ペーチが迎えてきたから、帰るよ

「えつー？ ひみ……ひ

「それじゅ

新堂君はぐるりと踵を返した。

背中の方で伊崎さんと何か言つてゐる。

「——ヤウー？（放つておこでいいの~。）

「おまえが来てくれて助かったよ、ありがとう」

公園を出たと『』新堂君が私を抱いたまま『』言つた。

「……でも、門倉さん、大丈夫かな？」

やっぱり……伊崎さんと付き合つた方がいいのかな？

やうすれば、門倉さんは助かるって言つてたし……」

（新堂君……）

「あの女、明日にでもまたこの彼のところに来るわよ？」

『』がつけばジャスマシンさんが後ろをついて来ていた。

もううん、ジャスマシンさんの声は新堂君には聞こえていないし、姿も見えていない。

「アンタが誰かの命を狩らない限り、あの女は彼に迫り続けるわよ。

彼は拒み続ける事が出来るかしら？」

今でからこんなにアンタの事を想つてるのよ？ セツナだつて。

アンタがこのままずっと田を覚まさなかつたら……わかるわよね  
？」

(私が田を覚まさなかつたら……)

「ああ、今すぐこの死神の鎌での女の命を狩つてらっしゃい！」

ジャスミンさんは私に大きな鎌を差し出した。

怪しく黒光りしている大きなその鎌を受け取った。

「……あれ？ ピーチ？」

私の姿は仔猫から元の姿に戻っていた。

しかし、彼には見えていないらしい。

「いつの間にいなくなつたんだろう？」

新堂君はキョロキョロと辺りを見回して、仔猫の私を捲した。

「ああ、行くわよ」

ジャスミンさんはそう言つて私の肩を抱いた。

「ほら、あの女、まだそこにいるわよ」

ジャスミンさんに連れられ、公園に戻るとさつきのベンチに伊崎さんは座っていた。

何か考え方をしているのか俯いている。

「ああ……その大鎌を女の首に掛けなさい」

そう言って私の背中を押すジャスミンさん。

伊崎さんの目の前で足を止め、ゴクリと息を呑む。

（伊崎さんをいなくなれば……）

大鎌を両手で持ち上げ、構える。

私の背丈よりも大きな鎌なのに、まったく重さを感じないのは今の私のこの体が

“本物”ではない事を物語つていた。

（私が伊崎さんの魂を狩れば……）

「鎌を振り上げて……」

ジャスミンさんが耳元に囁く。

私はその言葉に従い、大鎌を振り上げた。

彼女の魂をこの大鎌で狩りさえすれば、私は元の体に戻る事が出来る。

しかし、なかなか振り下ろす事が出来ない。

「何をもたもたしているの？？」

少しイラついたようにジャスミンさんが言つ。

「アンタ、あの男の事が好きなんでしょう？　この女に取られてもいいの？」

「そ、それは……」

(嫌だけど……)

「アンタがその鎌を振り下ろせば、彼を取られる事もないのよっ？  
彼もむづこの女に迫られる事はないのっ。彼はアンタのものになるのよっ？」

「……っ

そして私は……

私はゆっくりと鎌を下ろした。

「……アンタ、バカ？」

呆れたようなジャスミンさんの声。

私は出来なかつた。

伊崎さんを殺せなかつたのだ。

「『』あなたが……やつぱり、私……出来ませう」

（無理……誰かを殺して、自分の命を守るだなんて……）

「やつ……それじゃあ、やつぱりアンタの魂を狩るしかないわね？」

大鎌をジャスミンさんに返すと、彼はとても冷酷そうな顔で言った。

「あつたぐ……うまく行けば上腹部に気が付かれずに済んだのに……」

ジャスミンさんは冷ややかに咳ながら大鎌を振り上げた。

「……」

私はぎゅっと強く畠田を瞑つた。

首筋を何かが通った気がして、“狩られたんだ”と直感する。でも、痛みも何も感じなかつた。

(ああ……これで本当に死んじゃつたんだ……)

もう……

新堂君に会えないんだ。

「あーあ……彼、可哀想に」

ジャスミンさんの声が聞こえ、ぽんやりしていた周りの景色が段々ハツキリしてきた。

いや……

そうじゃない。

また、あの空間に連れて来られたのだ。

ジャスミンちゃんと初めて会った真っ暗闇の空間に。

ハツキリ見え始めたのは、私の足元に映し出されている新堂君の姿だった。

「新堂君……っ」

彼は、あの公園のベンチの前、小さな黒い仔猫の亡骸を抱いて泣いていた。

さつきまで私の魂が宿っていた仔猫だ。

“ピーチ……ピーチ……”

彼の口元の動きをみると、そう叫びながら涙を流していた。

そして、もう一つ、ジャスミンさんは私の“本物”的体が横たわっている病室の様子を映し出した。

「あ……」

顔には白い布が掛けられていた。

それが何を意味しているかは説明されなくともわかった。

お父さん、お母さん、寧々が泣いていた。

「アンタがあの女を殺せなかつた所為でいろんな人が悲しむ事になつたわねえ？」

「……」

「今さら、泣いても遅いのよ」

ジャスミンちゃんに呟われ、私は自分が泣いていたような気がした。  
でも、本当に泣いてるのかどうかわからぬ。

魂だけになってしまったから。

涙を流しているかどうかさえ感じられないなつてしまつたのだ  
。

「それじゃ、そろそろ行きましょうか」

「…………ですか？」

「……………あの世、」決まつてゐるでしょ？

（あの世……）

しかし……

「さあ、行くわよ」

そう言って、ジャスミンさんが両手を広げた時、

「待て！」

どこからかとても低い声が聞こえた。

声の主は暗闇の中からスッと姿を現した。

「つー？」

それと同時に声にならない声を上げ、禍々しい光を佩びた球に包まれるジャスミンさん。

「ジャ、ジャスミンさんっ！？」

光の球に包まれた途端、ジャスミンさんはぐつたりした。

その手からは大鎌もなくなっている。

「心配するな。強制送還と連行する間だけの事だ」

艶やかな低音ボイス。

淡々とした口調のその人は腰よりも長いストレートの黒髪でジャスマリンさんと同じ様に

漆黒のローブを纏っていた。

ただ一つ違う事と言えば、とてもキレイなシルバーの指輪をしている事。

「強制送還と連行つて……どういう事ですか？」

「ジャスミンは死神界の掟を破った」

「捉……？」

「そうだ」

「……あなたは、一体……？」

「私は死神界を管理している組織の一員だ」

(じゅあ……ジャスミンさんが言つてた“上層部”つていうところの  
人?)

「今回の一件、おまえは何も知らなかつたよつだな」

「どうこいつ事ですか？ ジャスミンさん……何をしたんですか？」

「まず、今回の事はジャスミンが間違えておまえの魂をここに呼んだ事が原因だ」

「“間違えて”……？」

「そうだ、本来はこの人間が狩られるはずだった」

そう言つと彼は数枚の紙を私に見せてくれた。

その紙には名前や年齢、経歴なんかも書いてあつた。

「『門倉 桃、89歳』……つ？」「これ……つ」

「ジャスミンはその資料の経歴を見て間違いに気付いた。

だが、ペナルティから逃れる為に知恵を働かせたようだな」

“あ……”

(セツイえぱ……あの時、ジャスミンさん……)

「ここでの資料に書かれている内容と魂を照合し、間違いがなければ狩る。

しかし、間違っている場合は速やかに魂を元に戻さなければならぬ。

それが今回ジャスミンは戻す事無く、おまえを利用した。

おまえを使って他人を狩らせ、その他人に本来狩るべきだった人間を狩らせる。

いきなり自分と同姓同名の人間を狩らせるとおまえに怪しまれるからな。

だが、それは死神界にとつては重罪だ

「ジャスミンさんは、どうなるんですか？」

「禁固刑千年だ」

「千……つー？ そんな……つ」

「我々死神は人間の魂を狩る事の出来る唯一の存在だ。

その分、魂の取り扱いには慎重でなくてはならない。

おまえ達人間界でも人を殺めたらそれなりの罰を受けるだろ？

「それと同じ事だ」

「で、でも……千年で……」

「死神の寿命は約1・500年だ。

ジャスミンは今200歳……千年牢獄の中で過ごしたとしても300年は死神としてやり直せる

「そうですか…………ヒーリング、ヒーリング…………どうですか？」

「おまえ達人間の住む“下界”と我々死神と天界人の住む“天界”の間の空間だ」

「空間……」

「我等死神が狩るべき魂をここへ呼び、鎌で狩り取った後、天界へ送る為の場所だ」

「そんな空間が……」

「後一秒、私の到着が遅れていたら、おまえの魂は天界へと送ら

れ、

「一度と元の体で下界へ戻る事は出来なかつただろう。

間に合つてよかつた……」

黒髪の男がほりと息を吐く。

「あ、あつがとひざをこました」

「いや……」うちの方こそ我等死神の不手際に巻き込んでしまつて申し訳なかつた。

それで、この後の事だが……」

「は、はー」

「おまえがジャスマシンこみつて」へ連れて来られた口まで遡る

「え……駅の階段から落ちた日の事ですか?」

「やうだ

「それじゃ、私は……死ななくていいんですか?」

「ああ、元々あの日、階段から落おちるのはおまえでない。  
遅刻しちゃつになつたのもジャスマリの仕業だ。

あの日の朝に戻り、その先の時間をやり直すのだ。

但し、おまえが猫になつていた間の記憶といじいでの記憶は全て消  
されてしまう。

それでもいいか?

「は、はー……っ

「では……」

「あ、ちょっと待つでこなーい」

「うん？」

何かを念じよひと田を開じかけていた黒髪の男が怪訝な顔を向けた。

「ジャスミンちゃんによひじへまつておこてください」

「……ああ、わかった」

黒髪の男はフツと微かに笑うと私に向かって再び何かを念じるよつに田を開じた。

私は、なんだか頭の中が段々と靄が掛かっていくような感覚に囚われた。

ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ・ラ

よく晴れた日の朝、電池を取り換えたばかりの目覚まし時計は  
いつもよつと大きな音を鳴らして私を起しつけてくれた。

「う～ん 気分爽快っ！ 今日は何かいい事あるかもっ」

すつきりとした寝覚めに私は大きく伸びをしてベッドを出た。

そして、 “いい事があるかも” といつ予感は現事に当たった。

「おはよ～、門倉さん」

(あ……)

学校へ向かう電車の中、彼が優しい笑顔で私に声を掛けてくれたのだ。

「おはよう、新堂君」

だから私も彼にとびきりの笑顔を返した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8370o/>

---

ねこねこぴーち

2010年12月14日06時09分発行